

令和6年度第2回小学校教科担任制推進協議会 実践交流資料

1 学校名・教科型

尾道市立因北小学校 4教科型

2 学校の概要

学級数及び児童数(R6.12.1現在)

	通常学級							特支 学級	合計
	1年	2年	3年	4年	5年	6年	計		
児童数	33	48	41	40	40	59	261	36	297
学級数	1	2	2	2	2	2	11	5	16

3 教科担任制推進教員を配置した授業計画

教科等	国語	書写	社会	算数	理科	音楽	図工	家庭	体育	道徳	総合	学活	外国語
週当たり標準授業時数	4	1	2.9	5	3	1.4	1.4	1.7	2.6	1	2	1	2
5年1組 (担任：A)	A	A	A	推進	専科	A	A	A	A	A	A	A	A
5年2組 (担任：B)	B	B	B	推進	専科	B	B	B	B	B	B	B	B

教科等	国語	書写	社会	算数	理科	音楽	図工	家庭	体育	道徳	総合	学活	外国語
週当たり標準授業時数	4	1	3	5	3	1.4	1.4	1.6	2.6	1	2	1	2
6年1組 (担任：C)	C	C	C	推進	専科	C	C	D	C	C	C	C	C
6年2組 (担任：D)	D	D	D	推進	専科	C	D	D	D	D	D	D	D

4 成果と課題

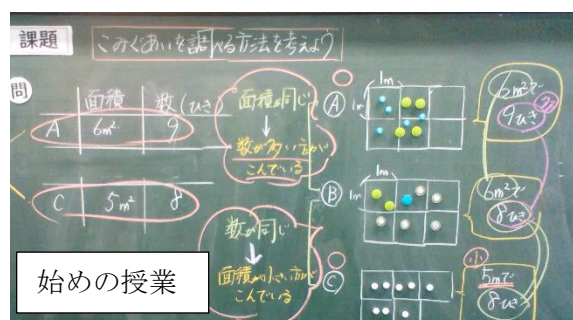
(①授業の質の向上, ②多面的な児童理解, ③小・中学校の円滑な接続, ④教師の負担軽減, ⑤その他)

<効果のあった取組>

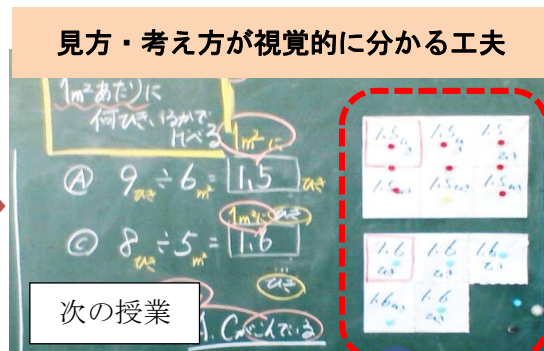
①授業の質の向上

5、6年生の2学級ずつを担当していることから、系統性を意識した授業づくりに努めることができた。また始めの学級の授業で見られた児童のつまずきをもとに、次の学級の授業では、指導方法を改善することができた。特に、「単位量当たり」「速さ」「分数の倍」の単元では、大切な見方・考え方が意識できるように、操作活動を取り入れたり視覚的に捉えられる工夫をしたりして、1㎡あたりにそろえて比べることを充実させることができた。

5年生「単位量当たりの大きさ」



どうやって比べるかを話し合ったが、何をそろえて比べるかが明確になっていない。



操作活動を取り入れ、1㎡あたりにそろえて比べることを視覚的に捉えられるように強調した。

②多面的な児童理解

・各担任との情報共有と役割分担

授業における子どもの様子を、積極的に担任に伝えるようにした。その際、実際のノートやプリントなどを写真にとって紹介し、個の課題だけでなく、できたことや成長も含めて伝えた。特に落ち着いて学習に取り組めていない児童については、どうすれば該当児童が学習に取り組めるようになるのか担任と一緒に考えたり、やり残した課題を推進教師がつきそって個別指導したりした。

・肯定的なフィードバック

学級が落ち着いていない時には、積極的にノートに肯定的なコメントを書き入れ、フィードバックした。その結果、「縮尺はまだ分からないけど、あきらめずにがんばる。」と個々の学習意欲が上がり、学級全体の雰囲気が前向きになった。

<成果>

①授業の質の向上

授業を通して見られた児童のつまずきや指導の不十分さを、次の学級の授業に生かしながら指導を充実させたり、5、6年生の学習内容の系統性を考えた学習を仕組んだりすることができた。結果、2学期単元末テスト「思考・判断・表現」の平均点は、5年生79点、6年生81点で、期待平均得点78点を上回ることができた。

②多面的な児童理解

児童の様々な面を教師間で情報共有することで、担任も推進教員も、該当児童を肯定的に受け止めたり接したりすることができた。職員間で、情報共有したり役割分担したりしながら取組を進めたことで、高学年全体が落ち着いて学習に臨むようになってきた。特に課題のある児童が、「～は苦手だけど、・・・は分かってきたんよ。」「～の・・・まではやってみる。」というように、自分なりの目標をもって取り組むようになった。

<課題>

⑤その他 「基礎・基本の定着」「学力が低い児童への指導」

2学期末の単元末テスト「知識・技能」の正答率70%を下回った児童は、5年生は4人（40人中）、6年生は2人（58人中：2名テスト未実施）であった。授業で間違い直しや小プリントなどを行っているが、基礎学力の定着は、宿題などの家庭学習と指導が連動することで効果的になる。学力が低い児童は、家庭学習の習慣が身に付いていないことから個別指導が必要とされるが、担任の考え方によっては、課題のある児童が取り残されているケースも見られる。そのため該当児童が十分な自信や手応えがもてずに、学習内容だけが進んでしまっている。



<対策>

⑤その他 「基礎・基本の定着」「学力が低い児童への指導」

・担任と情報共有を密にするとともに、指導のポイントなどを伝える。

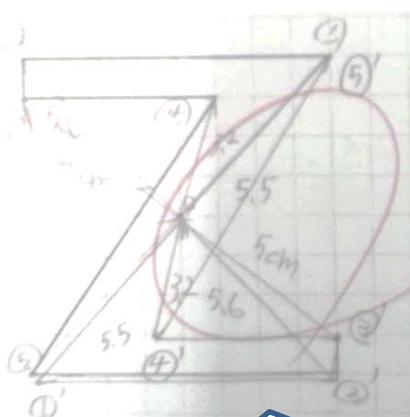
担任から、宿題で間違いが多かった問題や全体的に理解が十分でない問題を教えてもらい、次の授業の指導に生かすようにする。また計算練習や作図においては、計算過程（中間式）や補助線なども含めて習慣化していくことがポイントとなる。担任にも、どんなことに気をつけて丸付けや個別指導をするかを日々連携して取り組むようにする。

・授業の中で個別指導の時間を十分にとる。

基礎学力が十分身に付いていない児童が多い学級では、個別学習の時間をできるだけ長く設け、自分で問題にじっくり取り組めるようにする。その際、個のつまずきに応じた問題を準備したり、少人数で解き方を教え合う活動を取り入れたりしながら、学力が低い児童も、「自分で解いた！解けた！」という手応えのある経験を増やし、自信が深められるようにする。

・帯タイムやすき間時間を使って個別指導をする。

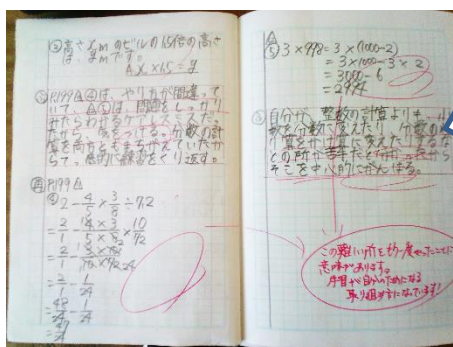
推進教員が、帯タイム（13：35～13：50の15分間）や朝の読書時間、休憩時間などを使って、小プリントやテストの間違い直しを行い、個のつまずきが残されたままにならないように個別指導をする。



作図では、どのような書き方をする
と効果的か、つきたい力を見据えて担
任と共有する。



個別学習の時
間を設定し、児
童自身が問題を
解けた経験を増
やしていく。



積極的に肯定的
なフィードバックをして、児童
の学習意欲を高
めるとともに、
自分自身の成長
を感じさせる。